

## 入選

# テーマ：誰かのために、わたしができること 「命のバトンタッチ」

山形県・新庄東高等学校1年 山石麗

健康保険被保険者証の裏に記載されている項目を一度は見たことがあるでしょう。その中には、住所、備考、そして、臓器提供への意思表示ができる記載欄がある。「臓器」を「提供」する。私には考えたくもない事実であった。しかし、母のある話を聞くことによって、私の気持ちは百八十度変わることになる。

私は生後一ヶ月余りの時、再生不良性貧血と診断された。この病気を完治させるためには「骨髄移植」が必要だと母は医師に告げられた。しかし、両親はもちろん、血縁者との一致が認められず骨髄ドナーの探索となってしまった。いくら探しても見つかることのないドナー、一年のうち四分の三もの月日にわたる入院を余儀なくされた私。そんな中、医学の進歩、医療スタッフの懸命な治療により骨髄移植をしていない私も今を生きていることができる。

「今の日本は十五歳から臓器提供ができるようになったんだよ。助からない命もたくさんある。麗も考えてみな」と母はつぶやいた。

臓器提供について考えていた私の頭の中には「脳死」という言葉ばかりが浮かんだ。脳が死んでしまうため、自分の意思表示は不可能だろう。そのような一般的な考えしか持っていない私はひどく戸惑っていた。その時、母は自分の保険証をそっと私に見せてくれた。ある臓器を抜き、全てに丸がついていた。驚きと不安が隠せなかった。たとえ家族から臓器提供の意思があったとしても大切な人を失ってしまうような気がするため私は頷くことはできない。それを見透かしたかのよつに母はつぶやいた。

「麗が病気の時ドナーは、いくら探しても待っても待っても見つからず薬にもすがらないだった。そんな思いをしている人は、この世界に

は数え切れない程いる。ママは星になってしまいうけど命のバトンがなくなるなら満足だよ」と。この瞬間私は思った。人を救えるのは私たち人間だけであるということ。そして人が人のために生きるということは幸せであるということなのだ。これは「命のバトンタッチ」であると気付くこともできた。

私が「脳死」になってしまった場合、自分の意思を表示することはできない。しかし生かされているのだ。たった一つの命は、一生懸命に生きているのだ。その命をバトンタッチしたいと私は思う。私の生命のはじまりを生み出した心臓だけを残し、他の臓器を提供し少しでも笑って生きる人が増えてほしいと思つてきた。

「臓器提供」これは「命のバトンタッチ」であり、私が思う本当の「幸せ」である。「脳死」と判断され周囲の愛情を自己の心で感じる事ができなくなった時、私は「ドナー」となりたい。苦しみや不安が続く毎日の中で、愛情だけで看病し続ける人々が安心し、毎日が笑みの絶えない幸せな愛情を感じることができるような「バトン」になりたい。そして、生まれてきた人々が生まれながらに持っている生存権の大切さを伝えたい。

私は、保険証の裏をまじまじと見詰め臓器の名、一つ一つにそつと〇をつけた。少しの戸惑いと「命のバトンタッチ」の素晴らしさを胸に刻みながら。